

のり海況速報 第10報 (22-10)

平成23年2月10日発行
千葉県水産総合研究センター
東京湾漁業研究所
千葉県農林水産技術会議

資料 のり海況調査 (2/8: 内湾, 2/10: 内房北部)
関東・東海海況速報 (2/7-10), 東京湾口海況図(2/10)
拓南による観測データ(12/1-2/7)

【水温・塩分の状況】

内湾から内房北部海域の表層水温(図1, 2)は前報(1月26-27日)からほぼ横這い状態で、9~14℃台になっています。

塩分は全域で31~33後半となっています。

一方、黒潮は先月末頃から変動しており、現在(2/10)三宅島の東に形成された冷水塊(水温: 15℃台)を迂回するパターンで、房総半島南東岸をやや離岸しながら東方向に流れているもよう。

このため、これまで、相模灘・東京湾口に向かって断続的に波及していた暖水はここに来て弱まり、金谷から久里浜間を結ぶラインの水温が14℃前後まで下がってきています。しかし、今後もこの動きには注意が必要と思われます。

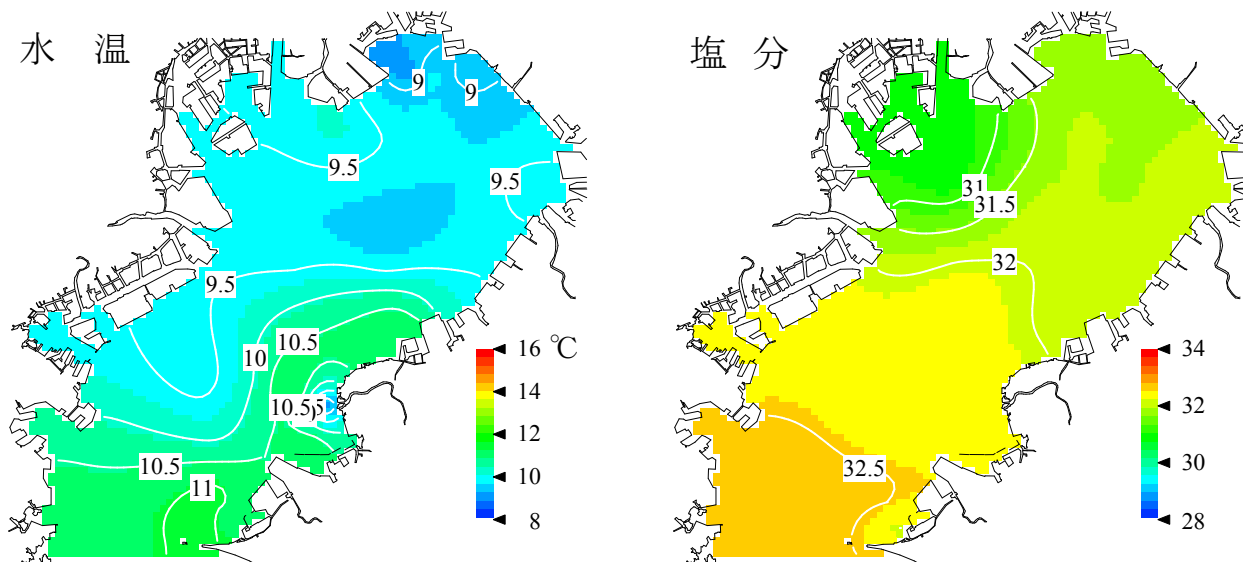


図1 表層の水温・塩分分布 (内湾 : 平成23年 2月 8日)

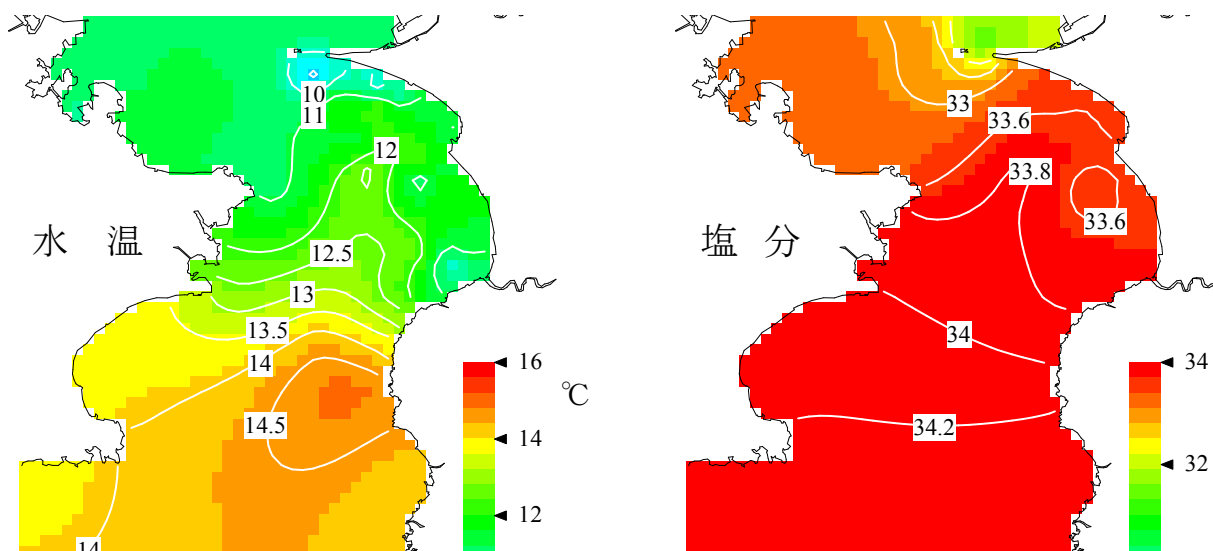


図2 表層の水温・塩分分布 (内房北部海域 : 平成23年2月10日)

【赤潮・栄養塩の状況】

赤潮は依然内湾中央から北部海域で継続しており、北部海域ではpH 8.5~8.6、透明度2m台を示し、水色も褐色のやや濃い赤潮状態でした。また、各地区のノリ漁場内もやや赤潮傾向となっていました。

優占種はケイ藻のタラシオネマとスケルトネマでした。また、内湾ではノリの色落ち被害をもたらすユーカンピアが増加し始め、千葉北部地区ではかなり多くなっています。

表層の栄養塩(図3)は前報よりさらにリン酸態リンが激減し、ほぼ内湾全域でノリの色落ち濃度(10 $\mu\text{g}/\ell$ 以下)を大きく下回っていました。また、各地先の栄養塩濃度をみると(図4)、各地先とも1月中旬頃からリン酸態リンが減少し、大貫ベタ・漁場付近では溶存無機態窒素もノリの色落ち濃度を下回る状況が続いています。

これらの状況から、依然、ノリ養殖にとって厳しい環境になっています。今後、栄養塩の回復のためには、まとまった降雨や時化などによる栄養塩の補給が望まれます。

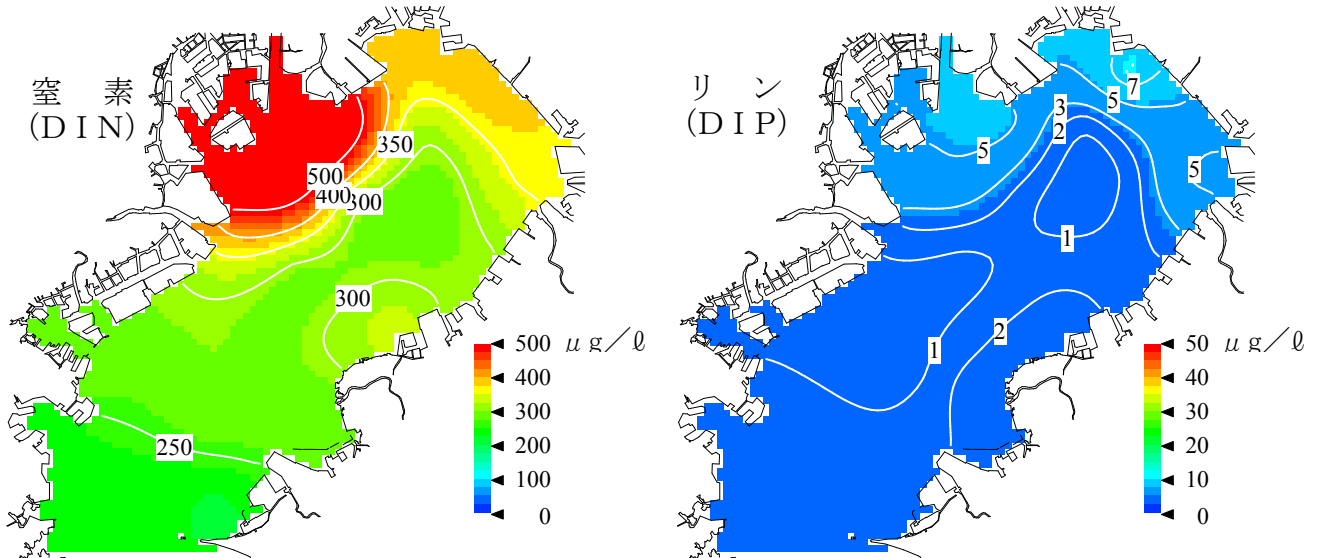


図3 表層の栄養塩濃度の分布 (内湾 : 平成23年 2月 8日)

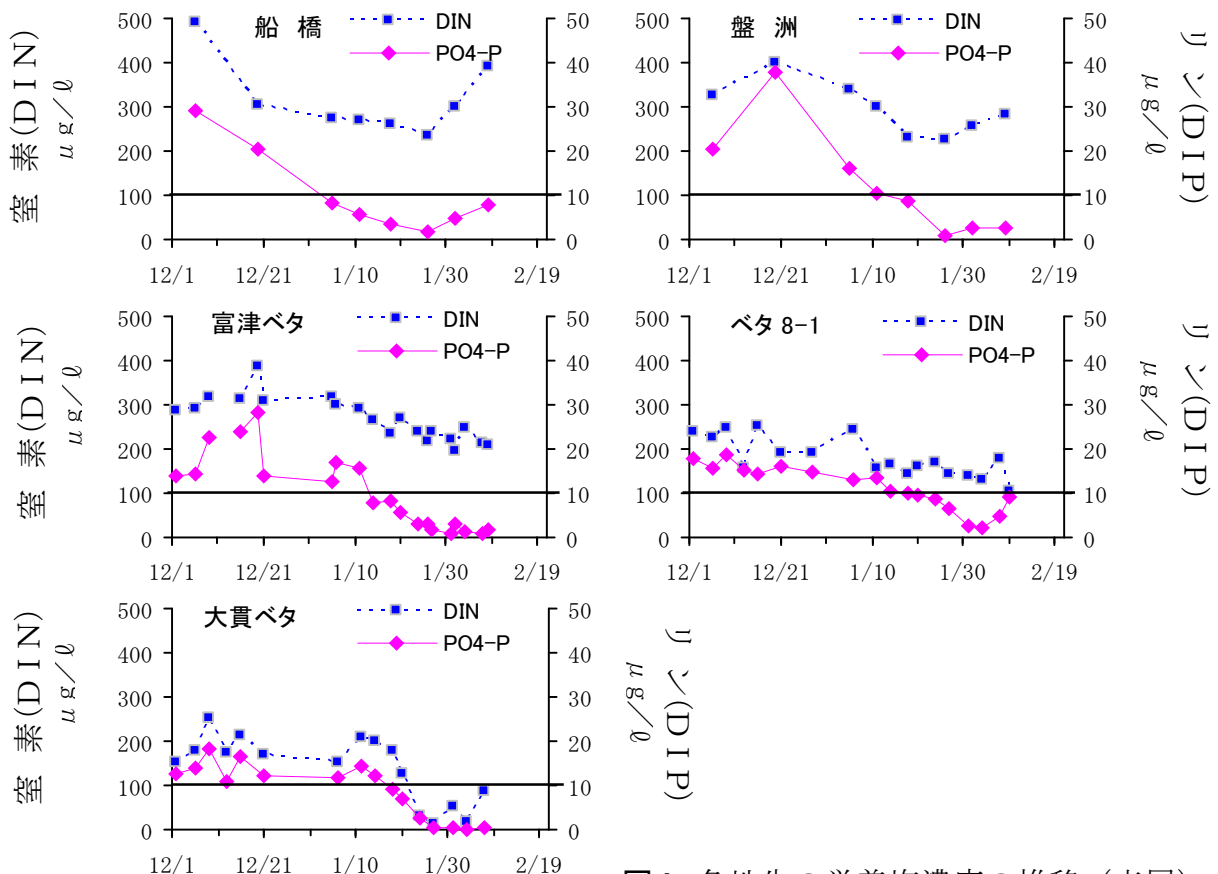


図4 各地先の栄養塩濃度の推移 (表層)